



12
~~11~~
あ
こ
く
さ
し
し
い
は
~~あ~~
ー
く
お
つ
こ
あ
や
せ

〇
 七
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

は
つ
さ
り
と
は
ふ
へ
ま
や
め
。
う
た
ふ
僕
の
今
つ

オ
あ
う
ゐ
わ
の
人
の
中
に
あ
る
人
に
感
ぜ

皆周は急のふり
頭台内青集

諧調は偽りなり

下

瀬戸内晴美

子
ん
子
ん
ん
34
1
か
4
3
ん
34
1
か
4
3
の
ん
3
31

ん
 ち
 ん
 ち
 う
 らい
 ゆ
 て
 あ
 ぐ
 う
 らい
 ゆ
 て
 あ
 ぐ
 ず
 け
 け
 け

と
ふ
と
ふ
よ
す
け
ハ
屋力のよ
す
け
ハ
屋力の
け
わ、
寧

[illegible]

諧調は偽りなり 下巻 奥付

昭和五十九年三月一日 第一刷

定価 一、一〇〇円

著者 瀬戸内晴美せとうち はるみ

装幀者 司 修

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三 郵便番号 一〇二

電話東京 (〇三) 二六五局 一二二一

本文印刷 理想社印刷所 附物印刷 精興社 製本 矢嶋製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

諧調は偽りなり
〈下巻〉

——
瀬戸内晴美

美は乱調にある。

諧調は偽りである。

——大杉栄

31

この頃、辻潤は武林無想庵と知りあい、たちまち互いに理解しあい無二の親友になってしまった。

その年十一月から、辻潤の姿は比叡山にあらわれている。

辻潤はしばらく食客として無想庵のところに転りこんでいたが、無想庵が比叡山へ籠って仕事をするといいだったので、辻もついていくはめになった。

無想庵は黒谷に臨んだ崖上に建てられた光明院の一室を借りて自炊することになり、辻潤は宿院に泊ることにしていた。

比叡山の冬は寒気がきびしい。十一月といっても、下界の厳寒の寒さで、もう毎日雪に見舞われる。

もちろんそんな時、宿院に泊るような酔狂な者はいなかった。

広い宿院に泊り客は辻潤ひとりだった。

無想庵はそこで「摩訶止観」を読んで居り、辻潤はやりかけていたスチルネルの翻譯に取り組むことにした。

寛永寺は天台宗の関東の総本山だし、比叡山は天台宗の総本山である。

東京ははるかになった。

女房に逃げられた辻潤の心の痛みも、ここでは誰も無関心だった。

山は終日雪が音もなく降り、夜は更に凄いほどの静かさだった。

晴れた日には星が地上で見るとは別の天空のもののように大きく強く輝いた。

骨まで凍るような寒気だったが、今の辻潤にはいっそその寒さが快かった。

翻譯に疲れると辻潤は尺八を吹いた。そもそも仏に捧げるために吹かれた尺八の音は、叡山の澄明な空気の中では、実に冴えかえった音色をあげた。下界では単調な「吟龍虚空」や「巢鶴鈴慕」の本曲が、実にふさわしかった。

辻潤の吹く尺八は叡山の谷々に響き渡り、ひっそりと雪をかぶった僧房の窓にしのびよっていた。

日によって辻は尺八でトロイメライを吹くことがあった。下界にいた頃、酔って尺八をとるとよく吹いた。甘い曲は辻が尺八に乗せると、不思議な哀愁が加って、聞く人の心にしみ入るようだった。

野枝がよくその曲をせがんだ。がらんとした人気がない広い宿院の壁や障子にトロイメライは微風のような旋律を走らせていく。

目を閉じている辻の臉に丸髻に結って、白粉の濃い、黒衿かけた黄八丈の野枝の姿と顔がさざ

なみ立つ水の底から浮び上るようであらわれてくる。化粧の下手な野枝の厚化粧はいつでもどこか白粉がむらになっていて、田舎の安宿場の女のような不粋なところがあった。不粋で可哀そうみたいだと、そんなりをさせたがる母や妹には憎まれ口をききながら、辻は野暮ったい田舎芸者のような土臭い野枝のそんな姿が嫌いではなかった。

「あたし、あわせてみる」

野枝は三味線をとって辻のトロイメライの後を追おうとした。時々、うまく合うところがあると、子供のように顔じゅうを笑み崩して黒い目をきらきらさせて喜んだ。

洗い髪の野枝が化粧気のない小麦色の頬や額に、木洩れ陽をちらちら躍らせながら、大きな目に情欲をみなぎらせて見上げている。

草いきれと野枝の濃い体臭がいきりまじり、辻の顔に迫ってくる。野枝にせがまれて散歩に出た染井の丘の林の中の小径。丘の下は一帶のなだらかな峡谷で人家も少く、郊外の空気は甘く爽やかで新緑の匂いがふたりを包みこんでいた。

遙かに王子の飛鳥山が見え、谷の向うにある寺から夕べの梵鐘が打ち鳴らされると、谷を渡ってふたりの足元に伝って来た。せまい家の中の家族から逃れて、この丘の林に来ると、野枝の野性はいつでも炎をふくように燃え上った。樹々の間から洩れてくる斜陽が野枝の頬を染め、蜩が降るように鳴いていた。どこからか聞えてくる山羊の声を真似て、野枝は自分もめえめえと鳴きながら、山羊の子のように丸い軀をすりよせてくる。

六畳と三畳と四畳半というささやかな家。父が死んだ後を埋めるように野枝が入って来た。母と妹との四人暮らしでは息苦しいほどせまかったが、誰も文句はいわなかった。妹が嫁ぐと一がその替りのように生れ、かえって狭く感じられた。それでも平安がみちていた。植木屋が家主なので家の造りは瀟洒で、庭が広く、庭木が様々に植えられていた。奥の三畳は中廊下に隔てられて

茶室風につくられていた。床の間もあれば廻り縁もついていた。床の間に竹田の墨絵の観音をかけ、床柱の花籠に季節の花が投げ入れられ、床の間と向いあった壁には、神代杉の額に入ったスビノザの肖像がかかっていた。壁いっぱいの本。そこが辻の書斎だった。

トロイメライは終わっていた。辻は尺八を膝に置いたまま、まだ目を閉じていた。瞼の中に浮んでいる映像を消すのが惜しまれた。その書斎はまた野枝との寢室にもなった。いきいきと移り変わる野枝の様々な表情が瞼の裏いっぱいに広がっていく。静止している時より喋っている時の野枝の方が魅力的だった。

心を澄ませるには「吟龍虚空」や「巢鶴鈴墓」がふさわしかったが、今日の辻は、その切迫した厳しい音を吹く気になれなかった。

下界から今朝、宮嶋資夫の便りが運ばれて来た。

手紙の間から落ちた新聞の切り抜き活字が、先ず目に飛び込んで来た。神近市子が大杉を刺した。

辻は血の気の薄い頬をいっそう蒼白にしたまま、表情を変えず活字を拾った。活字が紙面から一つずつ、突っ立つようにして目を射た。

宮嶋の手紙はもっと具体的だった。日蔭茶屋で野枝に出逢い、殴ったと報じてあった。

「大人気ないと今にして後悔しているけれど、その時は、すでに自首している神近の心中を思い、無視されている保子さんを目の前にして、野枝さんひとりがこの上なく図々しく見たのだ。心の底に君のことがひそんでいなかったとはいえない」

宮嶋の手紙を見て以来、辻は今日一日、自分の日課にしているスチルネルの「唯一者とその所有」の訳業が手につかなかったことに思いを及ぼしていた。

机の横にはもう七分通り訳した原稿がうずたかく置かれている。机の上には昨日訳していた原

稿が載っている。

——しかしながら、幸運なエゴイズムはより不運な者の道程の障害物にならなければならなかった。そして後者は、依然として人道主義の上にその立脚地を定めて所得の幾千という問題を進め、「人間は自らの要求するだけの物を持たなければならない」という結果にまでそれを回答した。

自分のエゴイズムは果してよくそれに満足せしめられるであろうか？「人間」が要求する物は決して自分や自分の要求を定める標準を供給はしない。なぜなら自分はその多少を使用することが出来るばかりだからである。自分は寧ろ自分が充足して恣に使用することが出来るだけを持たなければならない。

競争は競争すべき手段が各人の意のままにならないという不都合な状態から苦しむ、なぜならそれ等の手段は人格から取り出されるのではなく、偶然から取り出されるからである。大抵の人々は資本を持たない、だから品物を持たない、ことになる。——

辻はもうぼろぼろになりかかった英語版の本をめくった。幾度も読みかえしてアンダーラインが方々にひいてあった。まだ訳していないが頭に入ってしまったているその一つの箇所に目が留った。

——さて何人によらず、何物によらず、自分の愛さない人又は物が何故に、自分によって愛されなければならない権利を持つのであるか？両親、親戚、祖国、国民、故郷（等）遂には一般の同胞（兄弟、友愛）は悉く自分の愛に對する権利を有している、そして有無をいわせずその権利を要求する。かれ等はそれをかれ等の財産と見做している。そして若し自分がこれを尊敬しない時には、かれ等からかれ等に所属するところのものを取り去る盜賊と見做しているのである。自分が愛さなければならぬのである。若し愛が命令であり、法律であるなら、その時、自分は

そのように教育され、培養されなければならない、そして、若し自分がそれに戻れば処罰されるのである。故に人々は自分を無理に愛させようとして自分の上に出来るだけ強い「道徳的影響」を与うるであらう。……

スチルネルを読むことで、自分のかき乱された感情は、一応静まったかに見えたが、やはりペンを取る気にはならなかった。

辻は宿院を出て山径を黒谷の方へ歩きはじめた。崖の上に建てられた光明院に、武林無想庵が籠っていた。無想庵はそこで「摩訶止観」に取り組んでいた。「摩訶止観」といえば、「法華玄義」、「法華文句」と並んだ天台法華三大部の一つであり、隋の天台大師智顗ちぎの説き、天台宗の観心を教えて実践修行の本拠とされるものだった。無想庵は明治四十三年にも比叡山に上り「摩訶止観」に取り組み、止観行を行っていた。

前年アルツイバーシェフの「サーニン」を完訳して、サーニズム旋風を巻き起こしたばかりだった。

辻は自分より四つ年長の無想庵を心から敬愛していた。辻にとって好きになれる人間というのは、職業の別にかかわらず、虫が好きばいいのであって、文士や芸術家や、社会主義者は、自己と精神生活の色彩が似ているだけに、かえって虫の好かない連中が多くなる。そんな中で、無想庵は辻の好きな人間だった。人間は所詮自己と類似な人間を虫が好くのではないかと辻は考える。つまりは自分が好きということだ。辻は無想庵が好きだった。彼の書くものを読むと、自分の書いたものを読むような気がする。他人でありながら、こうも思想や、スタイルや感性が似ている人間は日本では無想庵を置いてないと思っていた。

老子莊子のエピゴーネンを以て任じ、スチルネルやショペンハウエルが好きというのも意見が合った。

辻が飲み疲れて空腹と疲労で、失心寸前になって、橋の上で倒れかけている時、無想庵に声をかけられた。

「辻くんじゃないか」

「……………」

「どうしたんだ、さっきから何度も声をかけているんだよ」

「声も出ないくらい腹がへてくたびれてるんだ」

「まあ、うちへ来給え。飯でも食って元気を出せよ」

そんな形で、麴町の無想庵の家へ伴われ、そのまま、居候をきめこんでしまった。

「忘却来時道」と記した扁額の上げられた庵は、門も傾き、雑草が庭一面生いしげって上田秋成の世界を連想させる。三畳の茶室めいた部屋があって、床の間の床柱に竹編みの一輪挿しが花もなく埃まみれにぶら下っている。

庭から飛石づたいでそこへ通じていた。日当りの悪いよどんだ空気がこもっていた。何となく、もう失ってしまった染井の書斎を思い出させる空間が、疲れきった辻の心身をなだめてくれるようだった。無想庵は二階の六畳に万年床を敷いてこもっていた。一日中顔も合わないようなお互い干渉しあわない暮しだが、出ていけともいわれないまま、辻は居候を決めこんでいた。一匹の猫と、叔母とも乳母とも居候ともわからない老婆がひとりいて、食事の世話をしてくれた。門の上に芭蕉がのびていたので辻は勝手に芭蕉庵と名づけていた。

勝手に読書三昧にふけた後で二人で巷に出て飲み歩く、もう一軒もう一軒と梯子をするのを二人はアナザア・ケンと名づけていた。

ボードレエルでも、ショペンハウエルでも、口にすればすぐ他のひとりが続きをつなぐ。倦怠も、絶望感も、美意識も、放浪癖までよく似た二人は、酒の相手としても申し分がなかった。

無想庵は一高から東大英文科というエリートコースを順調に進み、学生時代から小説「神秘」で上田敏に認められ、早くから名を知られたためか、結局大学を中退して、京都新聞に勤めてみたりしたがつづかず、結婚もしてみたものの、放蕩放浪の生活で家庭を壊し、辻潤と似たような身の上になっている。辻より恒産のある無想庵が一見惨めでないと見えるだけのことだ。

心機一転して、再び山に籠ろうといいだしたのは無想庵で、辻もまた無想庵の口ききで叡山へ上り、スチルネルだけでも完訳してしまおうと心がけた。

山でまで芭蕉庵のつづきにならないよう、無想庵は光明院に入り、辻は宿院に身を置いて、互いに邪魔をしない形をとっていた。

坂本から山道を上りつめた東塔に宿院はあったが、黒谷はそこからまだ奥の西塔へ行かなければならない。雪で道が悪いので三十分以上はかかる。

途中、辻は鐘楼の前へ出て、思いきり鐘を撞いてみた。人っ子ひとり通っていない叡山の雪の峯々を渡り、老杉の梢をつたい、鐘の音は思いがけないほど澄んだ鋭い音をたてて拡がっていく。凍りついたような山の空気が鐘の音に断ち切れ、切なそうな哭き声をあげていく。

辻は鐘の音に全身を吸いあげられるような快感を覚えた。下界からの手紙を見て以来、全身に重くつまっていた濁った瘴気のようなものが、鐘の音になぎ払われていく。

力まかせにもう二つほど撞いてから、辻は小走りに黒谷の方へ向った。

無想庵は縁側で土びんをかけた七輪をばたばたし、団扇で扇いでいるところだった。

「おう、どうした」

黙って縁側に立つ辻を見かえって、無想庵はいつもの声で訊いた。

「うん、ちょっと来てみたくなった」

「まあ上り給え、ちょうど飯が出来る。朝昼兼用だ、食っていけよ」

「……………」

辻は縁側から上った。土びんの中が煮立ってくると、無想庵はそこへ味噌を入れた。

「あっ、茶じゃなかったのか」

「味噌汁さ、昆布でだしをとって、ついでにそいつが実ともなる。どうだ、頭がいいだろう」

「おれにやらせりゃ、ぬたの一つもつくってみせるのに」

「空想の中ではどんな料理も出来るさ」

無想庵は土びんを七輪から下ろすと、座敷へ持ちこんだ。残り火は火鉢に移す。すっかり山の生活が身にそったような手つきだった。

「どうした、浮かない顔をしてるぞ」

無想庵は箸もつけない辻によりやく気がついたようにいう。

「酒はないか」

「少しそこに残っている。一合もないね」

辻は五合びんの底に残った酒を急須に入れて火鉢にかけた。

「宮嶋から手紙が来た……ここへ来たいっていうんだ」

無想庵は誰かにもらったらしい白菜の漬けものをはりはり噛みながら、たきたての御飯を頬ばっている。

「来たけりゃ、来ればいいさ」

辻はあたたまった酒を湯呑みに移してぐっと咽喉に流しこんだ。

「それで……」

「……………」

「宮嶋の話だけじゃないだろう」

「神近が大杉を刺した。大杉は死ななかったそうだ」

「あっても不思議じゃないことだ」

無想庵はそれで了解したというように、

「酒もいいが飯も食い給え、うまいぞこの味噌汁」

という。辻は酒の入った湯のみを大切そうに薄い両の掌で包んでいる。

「ここに来ていてよかったな」

無想庵がいった。

「そういうことさ」

「大杉も悪運の強い奴だね。しかし女は怖いな、のぼせ上ると何をするかしれやしない」

無想庵は山に入ると何カ月でも新聞を見ようとしてもしない。せっかく山に入って、下界の猥雑なニュースなど一切聞きたくないというのだ。

辻はズボンのポケットに入れてきた新聞の切り抜きを出さなくてよかったと思った。

無想庵は黙々と食事をつづけた。変な味噌汁もさも美味そうにふうふうふきながらすすっている。

辻は一合に満たない酒で全身が暖ってきた。胸につかえていたものが、酒にとかされたように軽くなった。

これで大杉の称えていたフリーラブの均衡は破れ、野枝が恋の勝利者となるだろう。市子は自分の手で二人を結びつけたようなものだ。そう思うと、市子があわれでならなかった。大杉を刺そうとは思わなかったけれど、野枝を刺して自分もその刃で胸を突いてもいいと、二度や三度は思わぬでもなかったことを辻は思い出していた。

岩野泡鳴が、山に来る少し前、偶然逢った時、